

七～八世紀における新羅の「築城」記事にみる軍事的動静

―日本古代山城の変化と国際的背景の関係についての試論―

植田喜兵成智

本稿は、新羅の「築城」記事を分析することで、七世紀から八世紀にかけての新羅の軍事的動静について明らかにするものである。この分析を通じて、当時の東アジアの国際情勢と新羅の軍事動向がどのように関連しているのかを整理できるだろう。また、新羅の「築城」記事と軍事的動静を検討することは、同時期に築造された、鞠智城をはじめとした日本の古代山城を理解するうえにも有益であると考えられる。

従来、日本の古代山城建設は、白村江の敗戦後、唐や新羅からの攻撃を警戒して建設されたものと考えられてきた。第一義的には、そのような目的のもと建設されたと理解してよいだろう。しかし、六七〇年代には新羅と唐の対立が深刻化しているように、白村江の戦いの直後に比して朝鮮半島情勢は大きく変化している。それゆえ、六七〇年以降はすでに唐や新羅の攻撃に備えるという対外情勢ではなかった可能性が高く、激変する東アジア情勢をみすえた検討が必要である。

また『続日本紀』によれば、六九八年、鞠智城、大野城、基肄城が「繕治」されたという。六六〇年代に最初に山城が建設されてから、すでに国際情勢が大きく変化したなかで修繕・改築されたこととなる。では、なぜこのような時期に古代山城が改築されたのだろうか。

本稿ではこれまで十分に注目されてこなかった新羅の「築城」記事とその軍事的動静に注目したい。新羅がどのような情勢で軍事施設を建設し、どのような軍事的戦略を構築しようとしたのかを明らかにする。これによって、日本の古代山城の築城・改築の背景についてもその外的要因との関連性を明らかにできると考えている。

検討の結果、『三国史记』新羅本紀にみられる七～八世紀の「築城」記事は、当時の国際情勢に応じた新羅の軍事拠点建設の様子を示していた。対百濟戦争、対唐戦争終結後の新羅の主たる戦略的関心が北方に移っていたことは、「築城」記事から看取できる。この事実が、新羅が実際に倭（日本）への軍事的作戦を実行する可能性が低かったことを意味する。だからこそ、六九八年代の「繕治」は新羅に対する防衛戦略とは別の目的で行われたものとみなすべきであろう。

七、八世紀における新羅の「築城」記事にみる軍事的動静

―日本古代山城の変化と国際的背景の関係についての試論―

植田喜兵成智

はじめに

本稿は、新羅の「築城」記事を分析することで、七世紀から八世紀にかけての新羅の軍事的動静について明らかにするものである。この分析を通じて、当時の東アジアの国際情勢と新羅の軍事動向がどのように関連しているのかを整理できるだろう。また、新羅の「築城」記事と軍事的動静を検討することは、同時期に築造あるいは改築された、鞠智城をはじめとした日本の古代山城を理解するうえにも有益であると考えられる。

周知のように、日本の古代山城は、『日本書紀』、『続日本紀』などに建設が記録された朝鮮式山城と、文献にそうした記録が無い神籠石系山城があり、九州北部、瀬戸内海沿いの中国・四国地域、大阪などの西日本に分布している^(一)。百濟復興のために朝鮮半島に軍勢を派遣した倭は、六六三年の白村江の戦いにおいて唐・新羅連合軍に敗北して撤退した。以後、唐・新羅からの侵攻に備えるため、倭の朝廷は防人や烽の制度を整備し、さらに亡命百濟人の技術提供を受けて大野城、基肄城、鞠智城などの古代山城を建設したというのが一般的な理解である。

一方の新羅は、六四〇年代以降、唐と連携して六六〇年に百濟を、六六八年に高句麗を滅ぼした。しかし、六七〇年以降、唐と対立す

ることとなり、両国は戦争状態に陥った。いわゆる羅唐戦争である〔徐栄教二〇〇六、李相勲二〇一二、盧泰敦二〇一二、植田喜兵成智二〇二二a・b・c・d〕。この戦争が遂行された時期に、新羅においても軍事・防衛体制の整備がみられる。新羅は戍兵を設置し^(二)、昼長城、西兄山城、沙熱山城、鉄関城などの軍事施設を盛んに建設している〔李相勲二〇一六〕。

右で述べたように、従来、日本の古代山城建設は、白村江の敗戦後、唐や新羅からの攻撃を警戒して建設されたものと考えられてきた。第一義的には、そのような目的のもと建設されたと理解してよいだろう。しかし、六七〇年代には新羅と唐の対立が深刻化しているように、白村江の戦いの直後に比して朝鮮半島情勢は大きく変化している。それゆえ、六七〇年以降はすでに唐や新羅の攻撃に備えるという対外情勢ではなかった可能性が高く、激変する東アジア情勢をみすえた検討が必要である〔酒寄雅志二〇一四〕。

また『続日本紀』によれば、六九八年、鞠智城、大野城、基肄城が「繕治」されたという。六六〇年代に最初に山城が建設されてから、すでに国際情勢が大きく変化したなかで修繕・改築されたこととなる。では、なぜこのような時期に古代山城が改築されたのだろうか。その背景や理由については、いくつかの見解が提起されているものの、

いまだ結論が出ていない。当時の朝鮮半島情勢、ひいては新羅の対外関係が詳細に把握されていないことが未解明である一因であるように思われる。

そこでこれまで十分に注目されてこなかった新羅の「築城」記事と、その軍事的動静に注目したい。新羅はどのような情勢で軍事施設を建設し、どのような軍事的戦略を構築しようとしたのか。この検討によって、日本の古代山城の築城・改築の背景についてもその外的要因との関連性を明らかにできると考えている。

一 問題の所在

(一) 共通理解の確認

まず日本の古代山城に関する記事を概観してみよう^(三)。そのすべてを列挙するわけではないが、おおまかな山城の動向を把握できる記事を列挙する。建設された当初の六六〇年代の記事は次のとおりである。

『日本書紀』天智三年（六六四）条

是歲。於對馬・壹岐島・筑紫國等、置防與烽。又於筑紫築大堤貯水。

名曰水城。

『日本書紀』天智四年（六六五）条

秋八月。遣達率答怵春初、築城於長門國。遣達率憶禮福留・

達率四比福夫於筑紫國、築大野及椽城。

『日本書紀』天智六年（六六七）一月条

是月。築倭國高安城・讚吉國山田郡屋島城・對馬國金田城。

次に七〇〇年前後の記事がある。この時期に改廃が行われたことが伝えられる。

『続日本紀』文武二年（六九八）五月条

甲申（二十五日）。令大宰府繕治大野・基肄・鞠智三城。

『続日本紀』大宝元年（七〇二）八月条

丙寅（二十六日）。廢高安城。其舍屋・雜儲物移貯于大倭・河内二國。そして八世紀以降、多くの山城が史料から姿を消す。最末期に登場するのが鞠智城の記事である。

『日本三代実録』元慶三年（八七九）三月条

十六日丙午。（略）又肥後國菊池郡城院兵庫戸、自鳴。

以上のように、断片的ながらいくつかの記事に古代山城の記事は登場する^(四)。こうした状況をふまえて、六六三年、白村江の敗戦後、唐・新羅と対立した国際情勢のなかで山城は建設され、国際的緊張感が弱まると、七〇〇年前後に改修あるいは廃止され、のちに一部の山城は他の目的に転用されるなど、機能・役割に変化があったことなどが論じられている。こうした時期ごとの変化と当時の国際情勢との対応については、一定の共通理解が成立していると考えられる。

すると、六九八年に実施された大野城、基肄城、そして鞠智城の「繕治」も当時の情勢と関連しているとみるのが自然であろう。ただし、近年の研究を参照すると、鞠智城の建設の背景や機能については様々な議論が展開されている^(五)。敗戦後の外敵侵入に備えて構築されたという見解〔坂本経堯一九七九、小田富士雄二〇一三、佐藤信二〇一四〕、一方で対外的な目的よりも対内的な九州地方の勢力への牽制のために築造されたという見解〔富田紘一一九七九、木崎康弘二〇一四〕、そして対内的な役割と対外的な役割を折衷するかなのような、地方豪族の独自の外交活動を牽制する目的があったという見解〔柿沼亮介二〇一四・二〇二一〕などが提起されている。

それぞれの研究論点については参照すべきところが多く、ミクロな視点での古代山城の築造背景に関してはおおむね賛同できる。しかし、古代山城の建設と当時の国際情勢との関わりあいについて、従来から白村江の戦い以後の朝鮮半島と東アジアの情勢を単純化して捉えすぎているきらいがあるように見受けられる。すなわち、第一に同時代の新羅側の視点の欠如である。外敵からの防衛として想定される勢力の一つは新羅であった。しかし、白村江の戦い以後、新羅の対外政策はめまぐるしく変化している。第二に、七世紀後半から八世紀初めの東アジア情勢の変化という視点が欠けている点である。六七〇年代には西のチベット地域で吐蕃が隆盛し、同時に北のモンゴルでは突厥が再興されて、唐を苦しめた。そして六九六年には渤海が建国されるなど、当時の東アジア情勢は一筋縄でなかった。したがって、古代山城の建設とその変化について対外情勢を関連させて論じるときには、当時の激変する朝鮮半島および東アジアの情勢を了解しなければならないだろう。

(二) 近年の対外関係史的な視点からの研究と問題点

右で述べたような対外情勢の理解という点を重視すると、近年のいくつかの研究が注目される。まず、前述した柿沼亮介氏の研究である〔柿沼亮介二〇一四・二〇二一〕。柿沼氏は、日本の対外関係史の視点から肥後と朝鮮半島に独自の外交ルートの存在したことを想定し、そうした外交権を中央の王権が掌握することで地方豪族を抑制しようとしたことを指摘した。しかし、柿沼氏の議論はあくまでも肥後あるいは倭王権側の視点から整理したものであって、かならずしも新羅の動向を十分に把握しているとはいえない。その意

味では従来の通説の枠を出ていないといえる。

新飼早樹子氏は、八世紀の新羅情勢に注目して鞠智城の機能変化過程を論じている〔新飼早樹子二〇二〇〕。新羅海賊の横行や新羅との関係悪化から、同時期の鞠智城も新羅などへの対外防衛意識と関連すると推定した。当時の国際情勢と山城の関係を整理する手法は大いに首肯できる。ところが、「七世紀後半に東アジアの情勢が緊迫するなか、鞠智城はそれに対応する形で築城されたものと考えられる。当該期、日本は白村江の敗戦により火急なる対外防衛整備の必要性が求められた時期にあった」〔新飼早樹子二〇二〇、三頁〕と述べており、七世紀後半から八世紀初めの朝鮮半島情勢についてはステレオタイプの説に基づいている。

近藤浩一氏は、新羅との交流という観点から日本の古代山城と新羅の山城の類似性に注目する〔近藤浩一二〇一六・二〇一七〕。韓国の二聖山城の構造と比較することで鞠智城の機能を理解することを試み、さらに六七〇～七〇〇年代の新羅と倭（日本）の友好関係、そして技術交流があり、鞠智城にもその影響があったと論じる。とりわけ七世紀後半の新羅と倭の関係を対立一辺倒で捉えず、むしろ交流の観点からとらえ直す視点は重要である。近藤氏の推定にはおおむね賛同するところだが、新羅自身の対外姿勢やトータルな軍事的動静についてはほとんど言及が無い。近藤氏の議論を強化するには、より詳細に新羅の軍事動向を整理する必要があるだろう。

このように、文献史、対外関係史の分野において朝鮮史料や韓国の考古学的研究成果も参照されるようになっていく。しかしながら共通する問題として次の点を指摘できる。すなわち、韓国の文献史側からの城（山城、土城）研究を十分に摂取できていない点、七

八世紀通じての新羅の軍事的動静について検討されていない点である。

(三) 韓国学界の研究と問題点

韓国における研究の進展はどうであろうか。考古学分野では、個別の山城、土城などの発掘成果が報告されている。一方、文献史分野においては次のような研究が進められている。

第一に、城の位置比定である。これは、考古学の研究成果も踏まえ、『三国史記』地理志などに登場する城の場所を推定していく作業である。

第二に、軍事史的な観点である〔민덕식一九八七、朴方龍一九九二、姜鍾薰二〇〇六、李文基二〇〇九、서영일二〇〇九、조효식二〇一〇〕。そのなかでもとりわけ李相勲氏の研究が注目される〔李相勲二〇一六〕。李相勲氏は、軍事史の観点から羅唐戦争期の新羅の築城記事进行分析している。六七三年以降、唐との戦争において新羅は守勢にまわり、複数の防衛ラインを構築するために大規模な築城を行ったと指摘した。特に唐の侵入経路にあわせて城拠点を築造している事実は、新羅の築城が防衛体制と密接に関わっていることを示唆する。本稿でも新羅の築城の背景については、この李相勲氏の成果に依るところが多い。ただし、その検討する時期が羅唐戦争期の六七〇年代に限定されており、通時代的な検討ではない。

第三に、社会史・政治史的な観点である。新羅において城は、かならずしも軍事的拠点とは限らず、新羅の祭祀制度と関連していた。新羅の山川祭祀の拠点となる場所は、単純に神聖な場所というわけではなく、交通や軍事的に重要な戦略的要衝に設置された。つまり、その土地を守護する山川の神に対して崇敬するものとされる〔崔光

植一九九四、채미하二〇〇九〕。また、城は新羅の地方行政の拠点である県城に指定されるなど、行政上の拠点でもあったことが指摘されている〔朴省炫二〇一二〕。これらの新羅の城の機能・役割についての議論は、日本の古代山城の役割を分析するうえでも示唆するところが多いのではないだろうか。

以上のような韓国側の研究成果を通覧すると、本稿の検討においては第二の軍事史的な観点から新羅の山城を分析することが必要であると考えられる。しかし、これらの研究は、韓国国内の研究成果に依拠しており、史料も新羅関連のものを中心に史料しているように、日本の古代山城との比較という視点は無い。さらに、新羅の築城に関して通時代的な視点はほゞみられない。そのため、七世紀から八世紀にかけての新羅の軍事動向と築城との関連性は不明確である。

だからこそ、新羅の「築城」記事を網羅的に分析し、新羅の対外防衛体制を含めた軍事的動静について整理することは重要である。次章から具体的に「築城」記事を検討していく。

二 「築城」記事と城の所在地

(一) 六七〇年代以前

具体的な検討を始める前に、本稿でいう「築城」記事を定義しておく。新羅王朝の年代記である『三国史記』の新羅本紀には、宮殿、寺院、城など様々な建設記事が収録されている⁽²⁾。そのなかでも軍事的な拠点でもある城、山城の建設、増築、改築に関する記録を一括して「築城」記事として取り扱う。

この基準に基づくと、『三国史記』新羅本紀には七世紀から八世紀にかけて、一九件の「築城」記事があり、三三箇所⁽³⁾の城について

の記事を見出すことができる。行論の便宜上、「築城」記事にAからSまでのアルファベットを振り当て、それらを五つの時期に区分して分析する。あわせて各城の位置も確認したい^(七)。

まずは六七〇年代以前の「築城」記事について検討しよう。城名の傍線は次のような意味である。新羅王都周辺のものに「○○城」、三国統一以前より新羅の領域だったものに「○○城」、旧百濟・高句麗領内だったものに「○○城」という傍線を記した。なお、以下の記事はすべて新羅本紀であり、羅紀と略して記す。

A 羅紀四・真平王四八年（六二六）条

築高墟城。

B 羅紀五・武烈王三年（六五五）条

三年。金仁問自唐歸、遂任軍主、監築獐山城。

C 羅紀六・文武王元年（六六一）九月条

築熊峴城。

D 羅紀六・文武王三年（六六三）春正月条

三年春正月。作長倉於南山新城。

E 羅紀六・文武王三年（六六三）春正月条

築富山城。

【現在の位置】

A 高墟城…慶尚北道慶州市の南山に位置する一帯

B 獐山城…慶尚北道慶州市龍城面にある龍城山城

C 熊峴城…忠清北道大田広域市大徳区または同道報恩郡俗離山面か

D 南山新城…慶尚北道慶州市の南山

E 富山城…慶尚北道慶州市乾川邑一帯

(二) 六七〇年代

F 羅紀七・文武王一二年（六七二）八月条

築漢山州書長城、周四千三百六十步。

G 羅紀七・文武王一三年（六七三）二月条

二月。増築西兄山城。

H 羅紀七・文武王一三年（六七三）八月条

増築沙熱山城。

I 羅紀七・文武王一三年（六七三）九月条

九月。築國原城①（古亂長城）・北兄山城②・召文城③・耳山城④・首若州走壤城⑤（一名迭巖城）・達含郡主岑城⑥・居烈州萬興寺山城⑦・歆良州骨争峴城⑧。

山城⑦・歆良州骨争峴城⑧。

J 羅紀七・文武王一五年（六七五）九月条

緣安北河設關城。又築鐵關城。

K 羅紀七・文武王一九年（六七九）八月条

増築南山城。

【現在の位置】

F 昼長城…京畿道広州市一帯の南漢山城

G 西兄山城…慶尚北道慶州市の西岳山城

H 沙熱山城…忠清北道堤川市清風里一帯

I ① 国原城…忠清北道忠州市

I ② 北兄山城…慶尚北道慶州市江東面の兄山一帯

I ③ 召文城…慶尚北道義城郡金城面水浄里の北にある金城山古城と

推定

I④耳山城…慶尚北道高靈郡高靈邑中化里の山城か

I⑤走壤城…江原道春川市にある鳳山古城と推定

I⑥主岑城…江原道高城郡に所在したと推定

I⑦万興寺山城…慶尚南道居昌郡居昌邑に所在したと推定

I⑧骨争峴城…慶尚南道梁山に所在したと推定

J安北河…咸鏡南道德源郡北面川と推定

K南山城…Dの南山新城に同じ

(三) 六八〇～六九〇年代

L羅紀八・神文王七年(六八七) 秋条

秋。築沙伐・歃良二州城。

M羅紀八・神文王九年(六八九) 秋閏九月二十六日条

秋閏九月二十六日。幸簪山城、築西原京城。

N羅紀八・神文王十一年(六九二) 条

築南原城。

O羅紀八・孝昭王三年(六九四) 冬条

冬。築松岳①・牛岑②二城。

【現在の位置】

L①沙伐州城…慶尚北道尚州市の紫山山城か

L②歃良州城…I⑧の骨争峴城と同じか

M西原京城…忠清北道清州市

N南原城…全羅北道南原市

O①松岳…開城特別市

O②牛岑…黄海北道金川郡県内里

(四) 七二〇～七三〇年代

P羅紀八・聖德王十二年(七二三) 一二月条

築開城。

Q羅紀八・聖德王二〇年(七二二) 七月条

二十年秋七月。徵何瑟羅道丁夫二千、築長城於北境。

R羅紀八・聖德王二十一年(七二二) 一〇月条

築毛伐郡城、以遮日本賊路。

【現在の位置】

P開城…開城特別市開豊区域。かつての黄海北道開豊郡開豊邑

Q何瑟羅道…江原道江陵市

R毛伐郡城…慶州市外東邑毛火里および蔚山広域市北区農所洞一帯

(五) 七六〇年代

S羅紀九・景德王二十二年(七六二) 五月条

二十一年夏五月。築五谷①・鵠巖②・漢城③・獐塞④・池城⑤・

徳谷⑥六城、各置太守。

【現在の位置】

S①五谷…黄海北道瑞興郡花谷里

S②鵠巖…黄海北道鳳山郡に所在したと推定

S③漢城…黄海南道三泉郡古県里

S④獐塞…黄海北道遂安郡に所在

S⑤池城：黄海南道海州市に所在
S⑥徳谷：黄海北道谷山郡谷山邑

紙幅の都合上、細かな検討については省略した。それぞれの位置を地図に示すと、図1のとおりである。

三 新羅の軍事動向とその変化

(一) 六七〇年代以前：王都防衛と百済攻略

六七〇年以前の「築城」記事については、当時の情勢を反映して

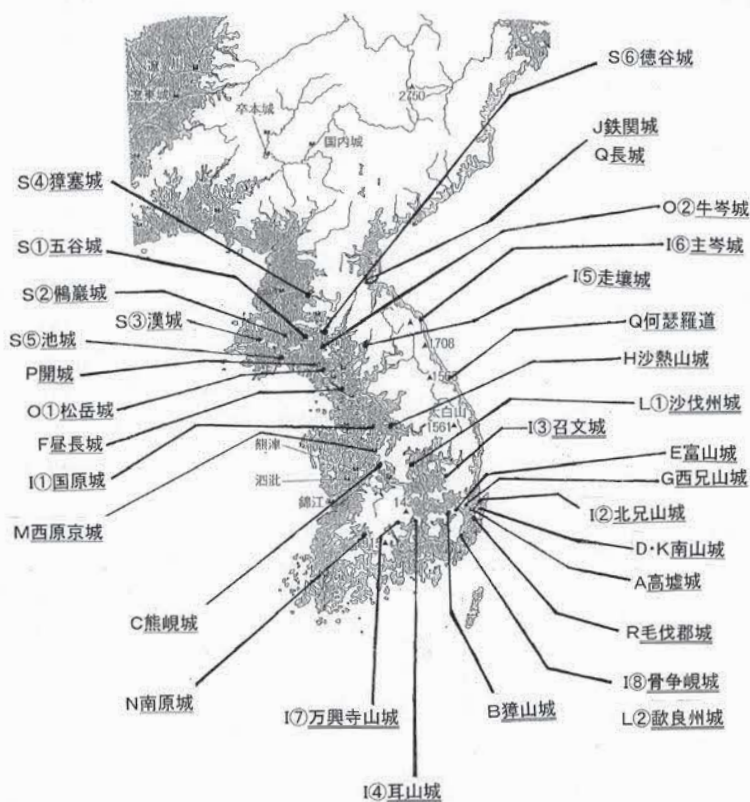


図1 7～8世紀に「築城」された新羅の城

百済攻略に関係してくるものが大部分である。ただし、新羅本紀の七世紀最初の「築城」記事であるA高墟城の建設は例外である。六二〇年代は、眞平王の時代であり、もちろんこの時期にはすでに新羅は百済と高句麗との抗争をくりひろげる三国時代であった。しかし、六四二年に百済の義慈王が大耶城を攻めて以降^(八)、三国の抗争が激化し、最終的には新羅の「統一戦争」へつながったとされる^(九)（盧泰敦二〇一二）。それゆえ、本稿ではAの記事については考察から除外する。

B獐山城が建設された六五五年は、新羅の武烈王金春秋が即位して二年目にあたる。前述したように、六四二年以降、新羅と百済の抗争は激化していた。そして、この武烈王の時代の六六〇年に唐と連合して百済攻略を成功させた^(九)。まさしくB獐山城は新羅の王都から百済へと向かう要衝にあたる。この地に城を築くことは、王都防衛と百済への進軍に関する拠点であったとみてよい。

百済滅亡後、唐は百済故地に熊津都督府を設置し、旧領土と遺民を統治しようとする^(一〇)（朴芝賢二〇一三、植田喜兵成智二〇二二c）^(一一)。しかし、旧百済の各地で残党・遺民の軍事的抵抗が続いた^(一二)（森公章一九九八、盧重国二〇〇三、金栄官二〇〇五、盧泰敦二〇一二）。倭からの援助も受けた百済遺民の活動は、六六三年のいわゆる白村江の戦いにおいて潰滅するまで活発であった。そのような状況であることをふまえると、六六一年のC熊峴城の拠点建設は、切迫した情勢のもと熊津付近に建設されたものであり、百済遺民の軍勢に対する抑えのためのものであったと考えられる。そして、六六三年正月には王都周辺のD南山新城・E富山城の拠点が築城・改築されている。新羅本紀によれば、この年の一〇月まで百済遺民の

軍勢の活動が確認できることから、百濟遺民の軍勢が侵攻してくることを想定したうえで王都防衛拠点を強化したものと考えられる。同時に、倭軍の動向も見越して、東南に位置する新羅の王都の防衛を強化したとも想定できるだろう。

(二) 六七〇年代…羅唐戦争期の軍事拠点

六六三年以降、唐の攻撃対象は高句麗となる。高句麗も抵抗を続けるが、唐・新羅の連合軍によつて六六八年に王都平壤が陥落して滅亡する。この段階まで新羅と唐の関係は表面上、友好的なものであったが、百濟故地の処遇をめぐる両国の関係は不穏なものとなっていた〔盧泰敦二〇一二〕。

そうしたところ反唐的な高句麗遺民が蜂起した。この集団は、新羅に亡命していた高句麗王族の安勝を擁立し、さらには新羅からの軍事的支援を受けていた。

『三国史記』卷六・新羅本紀六・文武王一〇年(六七〇)条

三月。沙湊薛烏儒與高句麗太兄高延武各率精兵一萬度鴨綠江、至屋骨。□□□靺鞨兵先至皆敦壤待之。夏四月四日。對戰、我

兵大克之、斬獲不可勝計。唐兵繼至、我兵退保白城。

新羅の官位沙湊をもつ薛烏儒と高句麗の高延武が連合して鴨綠江を渡り、靺鞨軍と対戦している。この靺鞨軍の援軍として唐軍が到来すると、新羅・高句麗の連合軍は引き上げたことが記されている。この屋骨城の戦いこそが羅唐戦争の開戦を告げる戦闘であったという〔李相勲二〇一二〕。その後、唐軍は高句麗遺民の反乱軍を征討することに注力し、その間に新羅は唐が間接統治していた旧百濟領を占領した(二〇)。これは、新羅が高句麗遺民の軍隊を支援すること

によって、唐軍の動きをそちらに釘付けにし、その間に新羅が百濟の旧領土を占領するための戦略であったと考えられる〔盧泰敦二〇一二、植田喜兵成智二〇二二a〔二〇一四〕〕。

このように六七〇年以降、新羅と唐の関係は敵対的なものとなっていた。それゆえに、この頃から新羅は倭にも遣使するようになっており、倭との関係を改善しようとしたとされる〔古畑徹二〇二二一九八三〕。

六七一年までは新羅の思いどおりに戦況は推移した。ところが、六七二年に戦局が変化した。

『三国史記』卷七・新羅本紀七・文武王一二年八月条

我兵與高句麗兵逆戰、斬首數千級。高侃(二)等退、追至石門戰之、我兵敗績。大阿飡曉川・沙湊義文・山世・阿飡能申・豆善・一吉飡安那含・良臣等死之。

右の史料にあるとおり、六七二年八月、新羅軍は石門(二)において高侃らが率いる唐軍と戦うが、敗北してしまい、多くの戦死者を出した。この報告を受けた文武王は、重臣の金庾信と以下のような問答を行ったと伝えられている。

『三国史記』卷四三・列伝三・金庾信伝下

大王聞之、問庾信曰「軍敗如此奈何」。對曰「唐人之謀、不可測也。宜使將卒、各守要害」。

金庾信は、唐軍の動きを予測できないことから、將兵に各地の要衝を守備させるように進言したという。これ以降、新羅は守勢に回ったとされる(차용길二〇〇八、李相勲二〇一六)。実際にこの後に「築城」記事が集中的に見られる。

同年の同月条にはF昼長城が建設されている。新羅が漢江・臨津

翌年にはGからIにかけて「築城」記事が並ぶ。G西兄山城やI②北兄山城は、慶州の周囲の山にあり、王都防衛に直接的に関わる築城である。I③召文城、I④耳山城、I⑦万興寺山城は、王都の西側の拠点であり、あきらかに唐軍の侵入に備えており、広い意味で王都の防衛拠点であらう。またI⑧骨争峴城は、王都の南からの進入路に築かれたものである。同時期に新羅と倭は交流を盛んにしていたことを考慮すると、倭に対する警戒というよりも、唐軍が南海岸から北上してくることを警戒したものとみられる。

實際上に六七五～六七六年の唐軍と新羅軍の交戦記事を確認してみよう。以下の記事は『三國史記』卷七・新羅本紀七・文武王一五年二月条から一六年十一月条までの記録である。

（文武王一五年〔六七五〕）秋九月。薛仁貴以宿衛學生風訓之父金眞珠伏誅於本國、引風訓爲鄉導來攻泉城。我將軍文訓等逆戰勝之、斬首一千四百級、取兵船四十艘。仁貴解圍退走。得戰馬一千匹。

得戰馬三萬三百八十匹。其餘兵仗稱是。

（文武王一六年〔六七六〕七月条）唐兵來攻道臨城拔之。縣令居尸知死之。

また留意しておきたいのが六七三年時点での新羅と唐の関係で



ある。六七二年の石門の戦いの後、翌年の九月条に新羅軍と唐軍の戦闘記事がみえる^(二四)。しかし、それ以外には局地的な戦闘記事が二件あるだけである^(二五)。このような戦闘がほとんど見られない状況が六七五年二月まで続いており、羅唐戦争は膠着状態にあったという指摘がある〔徐榮教二〇〇六〕。実は、新羅は六七二年の石門での敗戦以後、唐に使者を派遣していた。

『三国史記』卷七・新羅本紀七・文武王十二年(六七二) 九月条

王以向者百濟往訴於唐、請兵侵我、事勢急迫、不獲申奏、出兵討之、由是獲罪大朝。遂遣級浪原川・奈麻邊山及所留兵船郎將鉗耳大侯・萊州司馬王藝・本烈州長史王益・熊州都督府司馬禰軍・曾山司馬法聰・軍士一百七十人、上表乞罪曰(略)

新羅の文武王が百濟領を占領したことに對して、唐に釈明をするため使者を送り、そのほか唐軍の捕虜を返還している^(二六)。これによつて唐側の征討が一時中断されたものとみられる。

このように新羅と唐の關係がきわめて複雑であり、対立と友好の二分法では把握してきれない性格であることに注意が必要である。この点は、六七六年以降の羅唐戦争終結後の両国關係を考えるうえでも見逃してはならない。

六七五年には両軍の戦闘が再開され、六七六年十一月に両国間の最後の戦闘が行われるまで続く。そうした状況で建設されたのが丁安北河閼城と鉄閼城である。これらは新羅の東北辺に築かれたものであり、東海岸沿いに南下してくる唐軍を防ぐためのものとみてよい。戦争終結後、六七九年にK南山城を増築したという「築城」記事がある。この増築は、一見すると、唐との対立と無關係にみえる。従来、新羅と唐の關係は羅唐戦争後に回復したものと考えられてきた^(二七)。

この考えに基づくと、羅唐戦争以降、新羅と唐との關係は緩和され、友好的なものに轉換したかのように理解できる。すると唐と新羅がふたたび連合する可能性があり、倭へも軍事的脅威となりうることになる。

しかし、両国の關係の実態は異なつた。まず唐側に羅唐戦争終結後にも新羅を再征討する計画があつたことが指摘されている〔古畑徹二〇二一「一九八三」〕。

『資治通鑑』卷二〇二・唐紀・儀鳳三年(六七八) 九月条

上將發兵討新羅。侍中張文瓘臥疾在家、自輿入見諫曰、今吐蕃爲寇、方發兵西討。新羅雖云不順、未嘗犯邊。若又東征、臣恐公私不勝其弊。上乃止。癸亥、文瓘薨。

この記事では唐の高宗が新羅を再征討する計画があつたものの、西域の吐蕃情勢がより切迫していることを訴える張文瓘の諫言によつて中止されたことが伝えられている。したがつて唐側は事情が許せば新羅を再攻撃する計画があつたのである。

一方の新羅も唐への敵対的な姿勢を維持した。たとえば、反唐的な創寺縁起をもつ四天王寺を六七九年に完成させている〔武田幸男二〇二二「一九八六」〕。

『三国遺事』卷二・文虎王法敏条

相乃東還上聞、王甚憚之、會群臣問防禦策。角干金天尊奏曰、近有明朗法師、入龍宮、傳秘法而來。請詔問之。郎奏曰、狼山之南有神遊林。創四天王寺於其地、開設道場則可矣。時有貞州使走報曰、唐兵無數至我境、迴槩海上。王召明朗曰、事已逼至。如何。朗曰、以彩帛假構宜矣。乃以彩帛營寺、草構五方神像、以瑜珈明僧十二員。明朗爲上首、作文豆婁秘密之法。時唐羅兵

未交接、風濤怒起、唐舡皆没於水。(中略)後年辛未。唐更遣趙憲爲帥、亦以五萬兵來征、又作其法、舡沒如前。

この記事によれば、新羅の文武王は唐軍の撃退を祈念して四天王寺を建設させたことがわかる。またそれだけではなく前述した高句麗遺民が擁立した旧王族の安勝を新羅は保護し続けた。安勝の存在は、唐に対抗する象徴的な存在であり、これを保護しつづけることは潜在的に唐と対立する可能性をもちつづけていることになる〔植田喜兵成智二〇二一d・二〇二三〕。こうしたことから新羅と唐の軍事的緊張は緩和したわけではない。時期的に南山城の増築も王都防衛強化の一環であったとも考えられる。

また新羅は同時にたびたび使者を派遣して倭と友好関係を築こうとしていたことも見逃せない〔二八〕。羅唐戦争期は当然のことながら、戦争後も新羅は唐と対立的な関係が継続したことになる。だからこそ新羅は倭との関係を緊密にしようとしていたのである。一方で倭も遣唐使が六六九年に派遣されて以来、七〇二年まで派遣されなかったことを考慮すると、それほど唐と親密な関係ではなかったとみられる〔古畑徹二〇二一「一九八三」〕。したがって、六七〇年代の倭の立場を推測すると、唐の動向に引き続き警戒は必要であったであろうが、六六三年直後のような切迫した軍事的緊張状態ではなかったと考えられる。

(三) 六八〇～六九〇年代…唐との没交渉と地方支配の拠点

六八一年、文武王が死去し、神文王が即位した。以降、神文王は集権体制を確立していく〔李成市二〇〇四〕。一方、新羅は唐とは没交渉で疎遠な関係にあった〔古畑徹二〇二一「二〇一四」〕。例外

的に神文王の即位時の冊封の記事〔二九〕と、太宗金春秋の廟号が唐から問題視される記事〔三〇〕があるものの、それ以外には具体的な交渉は無く、神文王代は唐とほとんど交渉が無かったとみてよい。

一方の唐も東の新羅に積極的に関与する状況ではなかった。国内的には則天武后の台頭によって六九〇～七〇五年には唐が一時中断するなど、政治的抗争が行われていた〔外山軍治一九六六、氣賀澤保規一九九五〕。同時に、吐蕃、突厥の隆盛によってこれらの勢力との軍事的衝突が頻発した〔西嶋定生二〇〇〇「一九六二」、金子修一、二〇一九など〕。このような状況であったことから、新羅においては唐からの侵攻に備えるというよりも、地方支配の拠点に関する「築城」記事がみられる。

「沙伐・歆良」については、王都の南と西北に位置する拠点である。史料上には「州城」とあり、これらは軍事的な拠点としての城というよりも行政的な拠点とみるのが妥当であろう。

またM西原京城、N南原城など、九州五京の小京を「築城」した記事も確認できる。小京とは、王都が東南に位置する新羅が併合した百濟・高句麗の旧領を統治するため、各地に置かれた地方支配の拠点とされる〔藤田亮策一九六三「一九五三」〕。そのように考えると、六八〇～六九〇年代にみえるL・M・Nの記事は、新羅が当時、支配体制の整備に注力していたことと連関するとみてよい。

付言すると、Mで鐔山城に行幸した記事がみられる。これは「築城」記事ではないが、見逃せない記事である。同じく神文王九年(六八九)に達句伐(大邱)への遷都を検討し、最終的には実行されなかったことを伝える記事がみられる〔三三〕。地理選定に関わるものと想定すると、この行幸も広い意味で支配体制の整備に関わるものとみなす

ことができる。

つづく六九〇年代の〇の記事は、孝昭王の時代の「築城」記事である。①松岳、②牛岑では臨津江の北方に位置する。羅唐戦争終結直前の主戦場が臨津江周辺であったことを考えると、この頃から新羅は西海岸において北方への進出を始めたものとみられる。そしてこの孝昭王代（六九二～七〇二）は、唐との関係の改善がみられる時期である。唐へ複数回の使者を派遣しており、新羅が北進を始めるにあたって唐との関係も改善しようとしたものと解される〔古畑徹二〇二一「一九八三」〕。

六八〇～六九〇年代の時期は、渤海が建国する直前である。また唐も東方に向ける軍事的余裕がそれほど無い状態であった。それゆえ、明確な北方の軍事的脅威がまだ存在しておらず、新羅は国内の地方支配の拠点を確保しつつ、北方へと進出していったのである。

すなわち、朝鮮半島では新羅の支配が地方にまで波及し、安定化した状況であった。新羅と友好関係を維持する倭の立場からすれば、朝鮮半島に対する警戒を解くことにつながるものと思われる。すると、六九八年に鞠智城などの「繕治」記事の意味をどのように把握すべきだろうか。次節での検討をふまえて論じてみたい。

（四）七一〇～七二〇年代…渤海の隆盛と日本への警戒

契丹の蜂起に乗じて高句麗遺民が自立し、六九八年に渤海が建国された。渤海の成立は、七世紀後半の安定しつつあった東アジア情勢を大きく変化させた。渤海建国以降、新羅と唐の両国は渤海を警戒し、互いに緊密な関係を形成する。七〇三年以降、新羅は唐に連年遣使する状態となる〔古畑徹二〇二一「一九八三」〕。

渤海建国直後から七〇〇年代の「築城」記事は確認できないものの、Qの何瑟羅道の人々を動員して北境に長城を建設したという「築城」記事は、新羅が渤海と対立しており、軍事的脅威となりうる渤海を警戒した防衛戦略であったとみられる〔三三〕。またPの開城のように西海岸側からの北進は継続していた。

一方、それまで友好的であった新羅と日本の関係が冷却化していく。一般的には、新羅が唐との関係を改善し、倭（日本）との関係を重視しなくなった状況があり、倭（日本）に対して下位に立つた外交を継続する必要性が無くなったためとされる。ただし、六九七、七〇〇、七〇三年に新羅使は日本に派遣されており、対する日本も新羅に使者を派遣しており、両国の関係が急激に悪化し、軍事的緊張が生じたとは言いえない。両国の外交関係の画期にはいくつか議論があり、七三二年以降、新羅と日本の関係は政治的対立が先鋭化したという〔李成市二〇〇五〕。しかし、その前段階から徐々に新羅と日本の関係は変質していることが指摘されており〔浜田久美子二〇二二〕、関係悪化と関連して、七二二年にR毛伐郡城のように日本の侵攻に備えた軍事拠点を築いたものと推定される。

こうした状況をふまえて、六九八年の大野城、基肆城、鞠智城の改築についてどう考えられるだろうか。可能性として現段階では二つ想定できる。

第一に、六九六年の契丹の蜂起から六九八年の渤海の建国に至るまでの東アジア情勢の動乱と緊張に備えて、倭（日本）側が軍事拠点を再整備した可能性である。六九〇年代まで新羅と倭（日本）の関係は表面的には友好的であり、このことを前提にすると、新羅を警戒したことにはならない。だが、渤海建国の動きを警戒してこれ

ほどまでに迅速な「築城」を行ったのかはやや疑問が残る。

唯一この時点までに新羅と倭（日本）の関係が悪化する原因を想定するなら、安勝の高句麗国の処分である。前述したように、新羅は高句麗の王族安勝を保護していた。新羅はこれを高句麗王に冊封し、六七四年には報徳王の称号を与えた〔植田喜兵成智二〇二二d〕。だが、六八三年にこの安勝の高句麗国を廃止した。

『三国史記』 卷八・新羅本紀八・神文王三年（六八三） 条

冬十月。徵報徳王安勝爲蘇判。賜姓金氏、留京都、賜甲第良田。

『三国史記』 卷八・新羅本紀八・神文王四年（六八四） 条

十一月。安勝族子將軍大文、在金馬渚謀叛、事發伏誅。餘人見大文誅死、殺害官吏、據邑叛。王命將士討之、逆鬪幢主逼實死之。陷其城、徙其人於國南州郡、以其地爲金馬郡（大文或云悉伏）。

これらの記事によると、新羅は高句麗王の安勝を廃して骨品制に編入しており、翌年には高句麗遺民の反乱を鎮圧し、高句麗国を滅亡させている。この安勝の高句麗国が倭（日本）との外交関係を仲介していたという見解もあり〔鈴木靖民二〇一六「一九六八」、仲介していた高句麗国の滅亡が日本に対する警戒心を高めた可能性はある。しかし、六九八年の「繕治」まで十年ほど時間も空いており、このことをもって倭（日本）が新羅に対して警戒を強めたとは断定できない。

第二に、倭（日本）にとつての軍事的緊張緩和の流れにともなう動きとみて、これら三つの城を軍事拠点から別の機能を担わせるものとして改築しようとしたものという想定である。七世紀後半にかけて新羅との緊張関係は解消された。そして七〇一年には日本は遣唐使派遣を再開しており、唐との関係も改善されていく。このよう

に考えると、渤海の建国という東アジアにおいて再び軍事的緊張が高まる状況のなかで、直接的な軍事的脅威の無くなった日本においては七〇〇年代初頭に高安城などいくつかの山城が廃止されたという動きも理解できるのではないだろうか。

もちろんこの仮説を立証できる積極的な史料は見いだせず、断定することはできない。だが、六九八年における新羅と倭の関係に関して、次の新羅側の記録が注目される。

『三国史記』 卷八・新羅本紀八・孝昭王七年（六九八） 条

三月。日本國使至、王引見於崇禮殿。

この記事によると、日本の使者が新羅に派遣されており、崇礼殿という新羅の王都の宮殿において新羅王と接見している。外交使節の具体的な目的はわからないが、王宮に招かれるほどであれば両国の関係が敵対的ではなかったことを暗示しているだろう。それゆえ、日本にとつて七世紀後半から八世紀にかけて新羅による直接的な軍事侵攻の脅威に関しては、ほとんど考慮されるべきものではなくなっていたと考えられる。その可能性は、次の七六〇年代の「築城」記事を通じて高まる。

（五）七六〇年代…新羅の北進

新羅側の「築城」記事が最後に出現するのが景德王二十一年（七六二）である。注目すべきは、S①五谷、②鵝巖、③漢城、④獐塞、⑤池城、⑥徳谷の城は、礼成江から載寧江を越えたところに分布している。明らかに、七世紀後半以来の新羅の北進およびそのための拠点として建設されたものとみてよい。さらに新羅は北進を進めて、七八二年には涇江鎮典を設置し、大同江以南の地域の領有を確実なものとし

た〔李成市一九九八a「一九八一」〕。

これ以降、八世紀の新羅側の「築城」記事は確認できない。軍事拠点の建設が全く無かったとは思われないが、史書に残されたものは以上である。

このように「築城」記事を網羅的に分析すると、倭（日本）に対する軍事拠点の建設が確認できるのはRの毛伐郡城しかないことに気づく。対百済戦、対唐戦争、そして北進の過程にあわせて「築城」記事が見られたことを考慮すると、新羅は対日本の防衛、あるいは攻撃する具体的な計画をもっていなかったのではないだろうか。この推測が正しいとすると、頻繁に交流し情報を得ていた日本が新羅による軍事侵攻の可能性が無くなったと判断していた蓋然性は高い。したがって、六九八年の鞠智城をはじめとした、大野城、基肆城の「繕治」は、新羅に対する軍事的脅威を想定したものではなかったと考えられる。

むすびにかえて ―仮説と今後の展望

以上で議論してきたように、『三国史記』新羅本紀にみられる七～八世紀の「築城」記事は、当時の国際情勢に応じた新羅の軍事拠点建設の様子を示しているといえる。『三国史記』の記事は、史料として不備があるとはいえ、これら「築城」記事の伝えるところは妥当なものである。本稿の検討で何よりも重要な点は、新羅の「築城」記事が同時代の情勢を反映したものと理解できるということである。

対百済戦争、対唐戦争終結後の新羅の主たる戦略的関心が北方に移っていたことは、「築城」記事から看取できる。この事実、新

羅が実際に倭（日本）への軍事的作戦を実行する可能性が低かったことを意味する。だからこそ、六九八年代の「繕治」は新羅に対する防衛戦略とは別の目的で行われたものとみなすべきであろう。実際に、いかなる目的であったのかについては、現段階の筆者の能力には余るため、別途の検証が必要であり、今後の日本史研究者との議論を期待したい。

また今回は十分に議論することはできなかったが、近藤浩一氏がいうように、七世紀後半の新羅と倭（日本）の友好的な交流関係をふまえると、新羅の城の機能とそれとの類似性をより深く分析しなければならぬ。本稿では、「築城」記事を網羅的に分析するという意図のもと、城そのものの役割・機能については、地理上の位置関係など、軍事的な機能の一部について論じたに過ぎない。城が多様な機能を有していたことを考慮すると、新羅の祭祀制度や地方制度と関連させて議論することが必要になるだろう。この点については、今後の自身の課題としたい。

鞠智城もふくめた古代山城については、日本国内に局限された視点では解決できない問題があると考えらえる。東アジアの観点から日本の古代山城についても引き続き検討することが必要不可欠ではないだろうか。本稿が新羅の動向を把握したうえで古代山城の役割を議論するうえでの一助になれば幸いである。

注

(一) 研究史については、次の『古代文化』の特集号などを参照。「特輯 日本古代山城研究の現状(1)・(2)」『古代文化』四七一―一。

四七―一二、一九九五年、「特輯 日本古代山城の調査成果と研究展望（上）・（下）」『古代文化』六一・四・六二―二、二〇一〇年。

(二) 『三国史記』卷七・新羅本紀七・文武王十三年冬条に「始置外司正。

州二人、郡一人。初太宗王滅百濟、罷戍兵、至是復置」という記事がある。外司正は、新羅の地方に派遣された監察官の一種である〔武田幸男二〇二〇〕〔二〇〇〇〕。それが設置された同時に「戍兵」が再設置されたことが伝えられている。戍兵については、『三国史記』の職官志に記載が無く、最初の設置時期、沿革、人員などの詳細は不明である。しかし、字義からして守備兵を意味するものと解すことができ、従来見過ごされることの多かった本記事の「戍兵」が「防人」と意味の上で通じること注目したい。とりわけ六七三年という唐に対して防御戦略に転換する時点で戍兵が再設置されていることも当時の情勢を反映したものとみられる。本稿では、この存在を指摘するに留め、詳細な検討はあらためて行いたい。

(三) 「古代山城関係史料」〔笹山晴生二〇一〇〕で整理されているものを参考にした。

(四) 本稿では、矢野裕介二〇一九の鞠智城の四期区分を参照した。

(五) 近年の研究史の整理については、溝口優樹二〇二〇、垣中健志二〇二二などを参照した。

(六) 『三国史記』はその成立年代が高麗時代の一四五年にあたることから、その史料の信憑性に常に疑義が提起されてきた〔池内宏一九六〇〕〔一九三〇〕、稲葉岩吉一九三一。それゆえ、「築城」記事そのものもただ信用できる記事であるのかという批判も予想される。一方で、『三国史記』の記録には、「旧三国史」に基づく

記事など、独自の原典の史料的価値を評価する見解もある〔末松保和一九九七〕〔一九六六〕、田中俊明一九七七。また、羅唐戦争期の記録について中国史料よりも『三国史記』のほうが信頼性の高いという見解も存在する〔Jamieson一九六九〕。ちなみに筆者も羅唐戦争の期間にかぎった分析であるが、軍事的記録については同時代性が高く、信頼できる記事が多いと指摘したことがある〔植田喜兵成智二〇二二b〕〔二〇一四〕。したがって、すべての記事が無批判に認めるわけではないが、軍事的な記録でもある「築城」記事は基本的には信頼できるものと考えられる。後述する分析のなかで当時の情勢と「築城」記事が連動するものであることが確認できる。

(七) 各城の位置比定については、井上秀雄訳『三国史記』（平凡社、一九八〇～一九八八年）、『訳註 三国史記』（韓国精神文化研究院、一九九八年）、韓国国史編纂委員会の提供する韓国国史データベース〔<https://db.history.go.kr/>〕を参照した。また、国史編纂委員会のデータベースは、韓国精神文化研究院版を改訂した中央研究院版（二〇二二年刊）の訳注を基にして、最新の研究成果なども参照しており、それらの情報も加味して総合的に判断した。

(八) 『三国史記』卷五・新羅本紀五・善德王十一年（六四二）秋七月条「百濟王義慈大舉兵、攻取國西四十餘城」。

(九) 『三国史記』卷五・新羅本紀五・武烈王七年（六六〇）三月条「一月二二日条など参照。

(一〇) 『三国史記』卷六・新羅本紀六・文武王十一年七月条に「置所夫里州、以阿浪眞王爲都督」とあり、一般的に新羅が百濟の旧王都に所夫里州を設置して、自らの領土に編入した時点を目指す。

(一一) 原文では「保」とあるが、唐の將軍は高侃であるため「侃」の誤字とされる。

(一二) 石門の位置は確定されていない。黃海北道瑞興郡雲磨山にある石門寺付近という説と、京畿道華城市南陽邑石門里一帯という説がある。唐軍が平壤から南下してきた点と、この敗戦を受けて新羅が昼長城（南漢山城。現在の京畿道広州市一帯。華城市よりも約四五キロメートル東北に位置）を築いていることから、黃海北道とみるのが妥当か。

(一三) 本条の記事は九月条の後に掲げられているが、正確には年次不詳の記事群である。これらの記事は、「地方城主奮戦記事」と規定でき、月日に関係無く、文武王一五年条の末尾に一括してかけられたものとみなす〔古畑徹二〇二一「一九八三」、植田喜兵成智二〇二二b〔二〇一四〕〕。

(一四) 『三国史記』卷七・新羅本紀七・文武王一三年（六七三）九月条「唐兵與靺鞨契丹兵來侵北邊。凡九戰、我兵克之、斬首二千餘級。唐兵溺瓠瀟・王逢二河、死者不可勝計」。

(一五) 『三国史記』卷七・新羅本紀七・文武王一三年（六七三）冬条「唐兵攻高句麗牛岑城降之。契丹靺鞨兵、攻大楊城・童子城、滅之」。当該条の謝罪使節に派遣については、『三国史記』の文武王本紀に

錯乱の激しい箇所があり、六七五年に行われた謝罪の記事が文武王一二年条に紛れ込んだものとみる見解がある〔池内宏一九六〇「一九三〇」〕。しかし、『三国史記』の記事には固有の価値があり、なおかつその記事を簡単には否定することができない〔Jamieson一九六九、古畑徹二〇二一「二〇一四」〕。筆者はかつて錯乱の激しいとされる文武王一五・一六年条を再検討したことがあり〔植

田喜兵成智二〇二二b〔二〇一四〕〕、詳論は省くが、この謝罪使節の派遣記事は六七二年のものとみてよいと考える。

(一七) 六七五年に新羅が唐に謝罪使を派遣したことで羅唐戦争が終結したものとみなす〔池内宏一九六〇「一九三〇」、西嶋定生二〇〇〇「一九六二」〕。戦争終結をどの時点に求めるべきかについては植田喜兵成智二〇二二b〔二〇一四〕参照。筆者は、謝罪使派遣時期と羅唐戦争の最終的な戦闘が行われた時期が異なっても不自然ではないと考えている。

(一八) 六七〇年代、安勝が倭に派遣した高句麗使とともに派遣した使節を含めると、新羅は倭に一二回遣使していることが史料上確認できる〔新藏正道一九九六、盧泰敦二〇二二〕。

(一九) 『三国史記』卷八・新羅本紀八・神文王即位記「文武王五年立爲太子、至是繼位。唐高宗遣使冊立爲新羅王、仍襲先王官爵」。

(二〇) 『三国史記』卷八・新羅本紀八・神文王一二年条に、唐皇帝が李世民の廟号である「太宗」と同じ「太宗」を武烈王の廟号に用いることを難詰する事件がみられる。これは両国が依然として対立的であったことを示すとされる〔盧泰敦二〇二二〕。

(二一) 『三国史記』卷八・新羅本紀八・神文王九年条「王欲移都達句伐、未果」。

(二二) 新羅と渤海の関係が没交渉であったことについては、李成市一九九八b「一九九二」参照。ただし、こうした見方には宋基豪二〇二〇「二〇一九」から異論も提起されている。しかし、『三国史記』などに両国の交渉記事がほぼ皆無であること、実際に長城を築いていることなどから、基本的には没交渉、敵対的であったとみてよいと考える。

参考文献

(日本語)

- 池内宏一九六〇「一九三〇」高句麗滅亡後の遺民の叛乱及び唐と新羅との関係『満鮮史研究』上世第二冊、初出一九三〇年
- 稲葉岩吉一九三一「三国史記の批判」『朝鮮』一九二
- 井上秀雄訳一九八〇～一九八八『三国史記』1、4、平凡社
- 植田喜兵成智二〇二二a「二〇一四」唐人郭行節墓誌からみえる六七一年の新羅征討軍『新羅・唐関係と百済・高句麗遺民―古代東アジア国際関係の変化と再編』山川出版社、初出二〇一四年
- 植田喜兵成智二〇二二b「二〇一四」羅唐戦争終結期の新羅の対唐意識『新羅・唐関係と百済・高句麗遺民―古代東アジア国際関係の変化と再編』山川出版社、初出二〇一四年
- 山川出版社、初出二〇一四年
- 植田喜兵成智二〇二二c「二〇一五」在唐百済遺民の存在様態と熊津都督府の建安移転『新羅・唐関係と百済・高句麗遺民―古代東アジア国際関係の変化と再編』山川出版社、初出二〇一五年
- 植田喜兵成智二〇二二d「新羅による安勝の『高句麗王』『報徳王』冊封と骨品制導入」『新羅・唐関係と百済・高句麗遺民―古代東アジア国際関係の変化と再編』山川出版社
- 小田富士雄編著一九八三『北九州瀬戸内の古代山城』名著出版
- 小田富士雄編著一九八五『西日本古代山城の研究』名著出版
- 小田富士雄二〇一三「熊本県・鞠智城をめぐる諸問題」『古代九州と東アジアⅡ』同成社
- 垣中健志二〇二二「地域社会からみた鞠智城―八世紀から十世紀を中心に―」『鞠智城と古代社会』一〇
- 柿沼亮介二〇一四「朝鮮式山城の外交・防衛上の機能の比較研究からみた

鞠智城」『鞠智城と古代社会』二一

柿沼亮介二〇二二「古代国家による辺境支配と鞠智城の機能の変質の相関」

『鞠智城と古代社会』九

金子修二二〇一九『古代東アジア世界史論考―改訂増補 隋唐の国際秩序と東アジア』八木書店

木崎康弘二〇一四「鞠智城選地論」覚書『鞠智城跡Ⅱ―論考篇2』熊本県教育委員会

氣賀澤保規一九九五『則天武后』白帝社

近藤浩二二〇一六「新羅との外交・交流史からみた肥後鞠智城―Ⅰ期後半Ⅱ期に対する再検討―」『鞠智城と古代社会』四

近藤浩二二〇一七「八世紀(Ⅱ期Ⅲ期)の鞠智城と肥後地域―新羅山城との比較検討から―」『鞠智城と古代社会』五

酒寄雅志二〇一四「古代東アジアの動向と鞠智城」『古代山城の成立と鞠智城―古代山城鞠智城築城の謎を探る』熊本県教育委員会

坂本経堯一九七九「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就て」『肥後上代文化の研究』肥後上代文化研究所・肥後考古学会、初出一九三七年

笹山晴生監修二〇一〇『古代山城 鞠智城を考える』山川出版社

佐藤信二〇一四「鞠智城の歴史的位置」『鞠智城跡Ⅱ―論考篇1』熊本県教育委員会

新飼早樹子二〇二〇「八世紀の国際情勢及び古代日本の対外措置からみる鞠智城の機能変遷過程に関する試論―Ⅲ期・Ⅳ期八世紀第4四半期を中心に―」『鞠智城と古代社会』八

新蔵正道一九九六「天武朝の対外関係と小高句麗」『日本書紀研究』二一〇

末松保和一九九七「一九六六」旧三国史と三国史記『朝鮮史と史料』末

松保和朝鮮史著作集六、吉川弘文館、初出一九六六年

鈴木靖民二〇一六「一九六八」『百済救援の役後の百済および高句麗の使について』『古代日本の東アジア交流史』勉誠出版、初出一九六八年

武田幸男二〇二〇「二〇〇〇」『新羅の二人派遣官と外司正—新羅地方検察官の系譜—』『新羅中古期の史的研究』勉誠社、初出二〇〇〇年

武田幸男二〇二二「一九八六」『創塔・創寺縁起から見た新羅人の国際観』『新羅政治社会史研究』勉誠社、初出一九八六年

田中俊明一九七七「『三国史記』撰進と『旧三国史』」『朝鮮学報』八三

谷山雅彦二〇一一「42 鬼ノ城」同成社

富田紘一九七九「鞠智城」『日本城郭大系 第一八卷 福岡・熊本・鹿児島』

新人物往来社、一九七九年

外山軍治一九六六「則天武后」中央公論社

西嶋定生二〇〇〇「一九六二」『古代東アジア世界と日本』岩波書店、初出一九六二年

盧泰敦(橋本繁訳)二〇一二『古代朝鮮 三国統一戦争史』岩波書店、原著二〇〇九年

浜田久美子二〇二二「八・九世紀の日本と新羅」『日本古代の外交と礼制』

吉川弘文館

藤田亮策一九六三「一九五三」『新羅九州五京考』『朝鮮学論考』藤田先生記念事業会、初出一九五三年

古畑徹二〇二一「一九八三」『七世紀末から八世紀初にかけての新羅・唐関係—新羅外交史の一試論』『渤海国と東アジア』汲古書院、初出一九八

三年

溝口優樹二〇二〇「氏族からみた古代肥後の地域社会と鞠智城」『鞠智城と

古代社会』八

森公章一九九八「『白村江』以後」講談社

矢野裕介二〇一九「鞠智城研究の現在」『熊本史学』一〇〇

李成市一九九八a「一九八一」『新羅兵制における江鎮典』『古代東アジアの民族と国家』岩波書店、初出一九八一年

李成市一九九八b「一九九二」『八世紀新羅・渤海関係の一視角—『新唐書』

新羅伝長人記事の再検討—』『古代東アジアの民族と国家』初出一九九一年

李成市二〇〇五「統一新羅と日本」武田幸男編『古代を考える 日本と朝鮮』

吉川弘文館

李成市二〇〇四「新羅文武・神文王代の集権政策と骨品制」『日本史研究』

五〇〇

(朝鮮語)

姜鍾薫二〇〇六「신라 왕정의 방어체제·경주 지역 성곽에 대한 검토를 중심으로」『신라문화재학술회의 논문집』二七

金榮官二〇〇五「百濟復興運動研究」書景文化社

盧重国二〇〇三「百濟復興運動史」一潮閣

민덕식一九八七「신라 왕정의 방비에 관한 고찰」『사학연구』三九

朴方龍一九九二「신라 왕도의 수비·慶州地域山城을 중심으로」

『신라문화』九

朴省炫二〇一二「신라 통일기 주·소정의 성과과 그 활용—한산주와

국원소정을 중심으로—」『한국성곽학보』二一

朴芝賢二〇一「熊津都督府의 성립과 운영」『韓國史論』六四

徐榮教二〇〇六「羅唐戰爭史研究」亜細亜文化社

서영인二〇〇九「신라의 국가형성과 발전단계에 따른 방어체제 연구」

『신라문화』三四

宋基豪二〇二〇「二〇一九」『남북국의 전쟁, 경쟁과 교류』『渤海史学史研究』서울대학교출판문화원、初出二〇一九年

植田喜兵成智二〇二三「670년대 신라와 당의 대립과 소통: 薛仁貴・

文武王書狀의 분석을 중심으로」『嶺南學』八五

李文基二〇〇四「신라 문무왕대의 군사정책에 대하여」『역사교육논집』三三

李文基二〇〇九「신라 경덕왕대에 재편된 왕도 방어 군사조직과 성곽의

활용」『신라문화』三四

李相勲二〇一二『羅唐戰爭研究』周留城出版社

李相勲二〇一六「나당전쟁기 신라의 대규모 축성과 그 의미」『韓國古代史

探究』二三、二〇一六年

Jamieson, John C. 一九六九「羅唐同盟의 瓦解: 韓中記事聚合와 比較」『歷

史學報』四四

鄭求福외 一九九八『訳註 三國史記』韓國精神文化研究院

정요근二〇一一「통일신라시기의 간선교통로・王京과 州治・小京 간

연결을 중심으로」『한국고대사연구』六三

조효식二〇一〇「유적 분포도를 활용한 영남지역 삼국시대 교통로와

방어체계검토」『지역과 역사』二六

차용걸二〇〇八「신라 석축 산성의 성립과 특징」『석당논총』四一

채미하二〇〇九「신라의 城제사와 그 의미」『역사민속학』三〇

崔光植一九九四「신라 대사 중사 소사의 제장 연구 新羅大祀・中祀・小祀

의 祭場 研究」『역사민속학』四

插图出典

図1: 「6世紀頃の朝鮮半島」(谷山雅彦二〇一一、一二七頁)を基に作成。

図2: 「羅唐戰爭675・676年の戦場」(植田喜兵成智二〇二二b、
六六頁)を引用。